

知床北岸ワンデリング

佐藤 創

〒060 札幌市北区北10条西5丁目 北海道大学環境科学研究科生態系管理学講座

はじめに

このワンデリングは私が3年目の夏にワンダーフォーゲル部の夏期ワンデリングの1つとして行なったものである。我が部の夏期は、主に沢を使った山登りが主体であるが、1部のパーティーは海へ行ったり、サイクリング、川下り等を行なうことがある。

今回のワンデリングは海と山とを組み合わせたもので、前半はボートと歩きと泳ぎによる知床北岸めぐり、そして後半はテッパンベツ川支流コタキ川を遡行して知床岳へ登り、ウナキベツ川を降り、羅臼へ抜けるというものであった。この報告はその前半部分を紹介するというものである。メンバーは5人で、事前の準備は、私が1年前に北大探検部の記録を見てここへ行こうと思ったから、装備の調達、メンバー募集、小樽赤岩海岸、漁入沢～漁岳～漁川遡行、積丹半島の伊佐内川及び西海岸等で練習を行なうというもので、比較的準備期間は長かったほうである。

日程

1979年8月4日～8月9日

メンバー

リーダー	佐藤 創	3年目
サブリーダー	原田裕之	3年目
メンバー	末広克尚	2年目
	庄司義則	1年目
	中森 進	1年目

装 備

テント、ナベ、石油コンロ、石油、ゴムボート（4人乗り）、オール、グランドシート（ゴムボートの底に保護のため充てる）、ヘルメット、ライフジャケット、アンカー、アンカーロープ、釣り道具、地下足袋、その他一般的夏装備

食 料

米、マカロニ、ラーメン、ソーメン、スイトン、酒、乾燥野菜、肉（現地調達を考えると少なめ）、昼

食（パン、ビスケット、乾パン等）

行動概略

ウトロ バス 知床大橋 ヒイラ ルシヤ川河口 徒歩 タキノ川河口 3人は徒歩及び泳ぎ
2人はゴムボート 知床岬 徒歩 文吉湾 船 ウトロ

行 動

8月4日 9時50分 ウトロ発

知床大橋でバスを降り、ヒッチも成功し、ルシヤ川口まで乗せてもらった。

この付近は知床半島でも山が低くなっていて広々とした草原状の丘は、心に安らぎを与えてくれるところである。チャカバパイ川の番屋からは地図通り道が無くなった。じりじりと照りつける太陽の下、ボートを含む重荷を背負って巨岩帯を歩くのは楽ではないが、いよいよ岩壁も海に迫ってきて、その苔むした岩肌が美しい。タキノ川に着きテントを張ると、さっそく泳いでみるが、話の通り水は冷たく肌がしびれた。ここの海は夏でも17℃前後と、ひじょうに冷たいのである。

夕方になると番屋のおじさんの好意で番屋に招かれたが、この先の様子を尋ねると「とにかく、ゴムボートでこの先へ行行った者は、8割がた敗退してくるので、漁船でたこ岩あたりまで連れて行ってやるから…」と強く言われた。「いや、とにかく行ってみます」と拒んだが、結局次の日漁船で様子を見に行くことになった。

13時35分 タキノ川着

8月5日

リーダーとサブリーダーが漁船で様子を見に行ったが、行けるという見通しは変わらなかった。戻って試験的にボートをこぎ出すことになった。風が強かったが順風に乗ってすべり出したが、突然岩壁に当たった風が沖方向への風となり、オール操作がきかなくなり沖へ出されそうになった。やっとの思いで番屋へ逃げ帰った。教訓は、風が

強い時は、いくら順風で波がなくともボートは出せない、ということである。番屋のおじさんの話も真実味をおびてきた。

8月6日 6時30分 タキノ川出発

天気は昨日と似ているが、波と風がないので出発する。2人がボート、3人が海岸である。たこ岩手前の岬を通過する際、3回泳いだ。我々が泳ぐ、という場所は岩が海に迫って、登っても、へつっても通過できない場所である。その際、ボート隊は近くで非常事態に備えて見ている。奇岩怪石がそびえ、なんとも不思議な景観である。

7時55分 タコ岩着

ボート乗員を交代し、カシュニの滝を過ぎた。その付近で4回泳ぐ。知床川手前の岬の通過には時間がかかった。海岸隊3人は2回泳いで先端にたどりついたが、そこからは波が打ちつけていて、泳ぐ距離も長かったので、ボート往復で基部まで運ぶことにする。サブリーダーだけは強引に泳いだ。途中で泳いでいるので、ボートにつかまらせて通過した。ここは40m程度泳がなければならぬので、ボートなしで行く場合は注意を要するだろう。

11時00分 基部着

13時40分 オケッチウシ川手前の番屋付近着

8月7日 7時40分 出発

今日はまた、一段と海が穏やかで、山が海に映し出されている。イタシュベワタラで2回泳いだ後、ボート乗員を交代する。それにしても、ボートの上でブカーッと煙草をふかしながら、海岸隊がなんとかへつろうと動きまわって、しぶしぶ1人づつ海にドボンと入っていく様子を見るのは、快感としか言いようがない。

アウンモイを過ぎると、ようやく青空が広がってきた。見ると水際には無数のウニがへばりついているので、しばらく休憩とする。ここは深い入り江になっていて、奥の方まで行くとそこは沢に変わっている不思議なところだ。ウニのとれる沢なので「ウニの沢」と名づけた。今晚はウニ寿司に決め、ウニを手あたりしだいに取った。ここから先は岩棚の上をくるぶしぐらいまでつかりながら快適に歩いていくことができた。といっても、この深さは潮の干満で変化するのだが、ボートの方

も湾の通過は岬と岬を直線コースで進み、かなり沖へ出ていた。ポロモイ川の少し先でテントを張る。ボートで釣りに出かけると、ガヤ20匹ほどの収穫で、晩飯はうに寿司とガヤ塩焼きと豪華になった。

13時00分 ポロモイ着

8月8日

昨日の味をしめて、朝飯前にガヤ釣りに出るとまたまた大漁である。

9時55分 ポロモイ発

メガネ岩を過ぎて、1ヶ所泳いで通過する。この辺までくると断崖も小規模になり、上はエゾキスゲの咲く草原となっている。海岸も棚状になっていて歩き易い。岬手前の22m地点付近で岩を登って上に出ると美しい草原となっていて、岬はもうすぐそこであった。

13時55分 アブラコ湾着

メンバー3人はさっそく釣りはじめリーダーサブリーダーは燈台へ登ってみた。海を見降ろすと、ウトロ側は穏やか、ラウス側は風で白波が立っている。東と西でこんな差があるのである。

8月9日 9時05分 発

草原の中の小道を文吉湾へ向かう。

9時40分 文吉湾着

文吉湾は、ここいらでは最も立派なコンクリート張りの港で、周囲の景観にマッチしているとは言い難い。話によるとこの港は、ここまで道路が開通することを前提に作られたものらしいが、将来はどのようなことになるのだろうか。

13時00分 文吉湾着

集荷船(番屋に寄って魚を積みながらウトロへ降ろす輸送船)に頼みこんで、ウトロまで送ってもらうことになった。船の上から沖に浮かぶブイを見て驚いたが、潮の流れがかなり速い。事前に調べたのだが、知床北岸は基部から岬方向へ海流があり、その流れも北海道の中でも指折りのものである。沿岸をゴムボートで行く分には影響はないが、思い切って1km以上沖へ出てこの流れに乗れば、岬まで1日で行けるであろう。

16時30分 ウトロ着

おわりに

私は知床の北岸は、この計画と合わせて2回経験がある。もう1回は3月に流氷を歩いて岬まで行こうとしたのだが、氷がなくなってしまい、タキノ川河口で引き返してきたのである。しかし、その時はイタシュベツ川河口付近から岩尾別までの断崖に沿って流氷を歩くことができた。その部分、特に五湖の断涯と呼ばれる地帯は垂壁がいきなり海に落ち込んでいて、夏に上のような方法で通過することはまず不可能と思われる。ほとんどが岩壁で、歩ける部分がほとんどないからである。その点で知床の海岸でも、先端部と中部では、地形の形成過程、地質、年代、波による浸食等が異なっていると思われる。

以上、知床北岸についての報告をしてきましたが、何かのお役に立てば幸いです。